

特別な人でなくても加害者に

報告書の先へ

前知事セクハラ問題を検証

性犯罪加害者の治療に取り組む「性障害専門医療センター」(東京)の福井裕輝代表理事(精神科医)は、杉本達治前知事のセクハラ問題を巡る報告書について「(具体的な加害行為などが)非常に正確に記述されているという印象を受けた」と評価する。

に長期間にわたり、LINE E(ライン)などで約千通に上る大量のメッセージを送信し、被害者にいったん謝罪するも同じ行為を再開している。「単なる衝動や行き過ぎでは説明できない。依存的で刺激を求める行動パターンが強く疑われる」と指摘した。

セクハラ加害者に共通して見られる心理的特徴として、3点を挙げる。一つは、社会的地位や成果を背景に「自分は例外だ」「許される存在だ」と考えてしまう認知のゆがみ。二つ目は、相手

は、相手が業務上配慮し、は、相手が業務上配慮し、景に「自分は例外だ」「許される存在だ」と考えてし、意」と受け取ってしまうまう認知のゆがみ。二つ目「相互性の錯覚」だ。そして、三つ目が、自らの言動が相手に与えた苦痛を「冗談」「コミュニケーションの一環」と矮小化する傾向である。

杉本氏が今回の調査を受け「よく考えてみたらセクハラであるとの認識に至った」などと述べている点についても、「立場が上になるにつれて『自分は良い人間だ』という認知が強まる構造がある。これにより無意識に事実認識をゆがめることがある」と解説。「被害が見えなくなるほど認知のゆがみが強かった可能性がある」と分析した。

一方で、治療が必要かどうかの診断を受けることは「責任を免除するためのものではない」と強調する。医学的に治療可能かどうか、再発を防げるかを見極めるためのものであり、行為の責任とは別の次元だという。「依存的で反復性が高い行動ほど、治療の有効性は高い」とも述べた。

セクハラ行為が公になる中で、前知事の二面性を感じた人は少なくない。「誰にでも表向きの顔とは別の顔がある。(ハラスメントの)加害者は特別な人ではない。権力や立場を持つ誰もがなり得る」と福井さん。だからこそ、組織全体でハラスメントを早い段階で発見できる仕組みを構築することが、再発防止への第一歩だと訴えた。

③ 加害者心理



性障害専門医療センター

福井裕輝代表理事

内容で特に注目すべきは加害行為の反復性だとい

つ。杉本氏は複数の県職員

て、3点を挙げる。一つ

は、社会的地位や成果を背

景に「自分は例外だ」「許

される存在だ」と考えてし